

[サステナビリティレポート2004](#) > [トップコミットメント&ハイライト](#) > [CSR-変わるものと変わらないもの-](#)

**トップコミットメント
ハイライト**

CSR -変わるものと変わらないもの-

富士ゼロックス株式会社
取締役会長
小林陽太郎

“企業のあり方”の基本は変わらない

CSR(企業の社会的責任)が今大きな注目を集めています。連日のようにCSRに関する記事が雑誌や新聞の紙面ににぎわっています。私もCSRへの注目の高まりを歓迎している一人ですが、同時に、CSRの“流行”的な扱いには少なからず違和感を覚えています。それは、CSRの本質はいつの時代も変わらない“企業のあり方”であり、本来流行とは無縁のものだと考えているからです。

洋の東西を問わず、継続的に社会から高い信頼を得ながら高い成果を挙げ続けている企業は、CSRという言葉が知られる前から、さまざまな社会の期待や要求を感じ取り、それに応える経営を継続しています。そのような企業が体現してきた“企業のあり方”がCSRの本質なのだと思います。日本にも古くから“商売道”“商人道”がありますが、そこに示された道も同じところに通じています。CSRとは時代を超えて大切な基本的“企業のあり方”なのです。



時代や社会で異なるCSRの中身とバランス

“企業のあり方”の基本がいつの時代も変わらない一方で、企業に期待され要求される具体的な中身とそのバランスは時代や社会の置かれた環境によって異なってきます。

日本で最初に企業の社会的責任という言葉が大きな注目を集めたのは1970年代です。当時も企業を見る社会の視線は極めて厳しく、それを受けて行なわれた議論は今日でも十分に通用する内容でした。しかし、今日と決定的に違うのは、当時は社会の企業に対する要求の大きな部分を公害問題が占めていたことです。今日では同じ環境問題でも期待される範囲とレベルははるかに広く高くなっています。環境以外の経済性や社会性に関するお客様、株主、従業員などのステークホルダーの要求も当時とは大きく変わっています。

CSR経営とサステナビリティレポート

企業がCSR経営を成功させる鍵は、変化する社会の企業への期待や要求を正しく把握すること、そして、その時々企業が置かれた状況の中で公正な判断を行ない、社会の理解を得ることです。そのことこそサステナビリティレポートの最も大切な役割です。自らが社会の期待や要求をどのようにとらえ、判断したかを広く知らせるとともに、それに対するフィードバックから、変化を察知し自らを変える機会になるからです。この良い循環をマネジメント・サイクルの中に地に足を付けた形で据えることが、社会から信頼され、存在を許され、期待される企業として生き続ける正道、すなわちCSRだと考えています。

